# 三宅訓導を語る

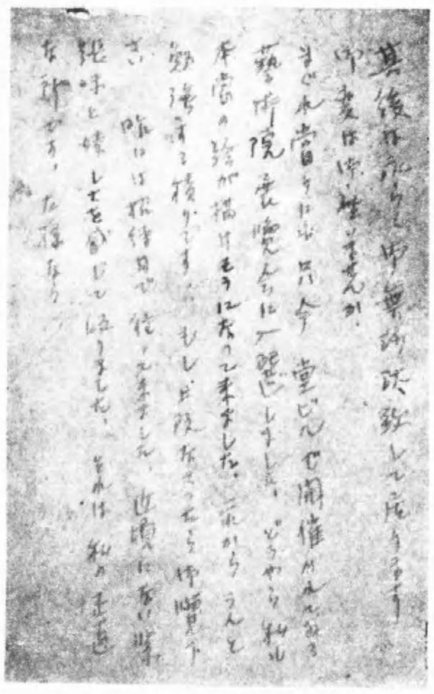
原静村著

始

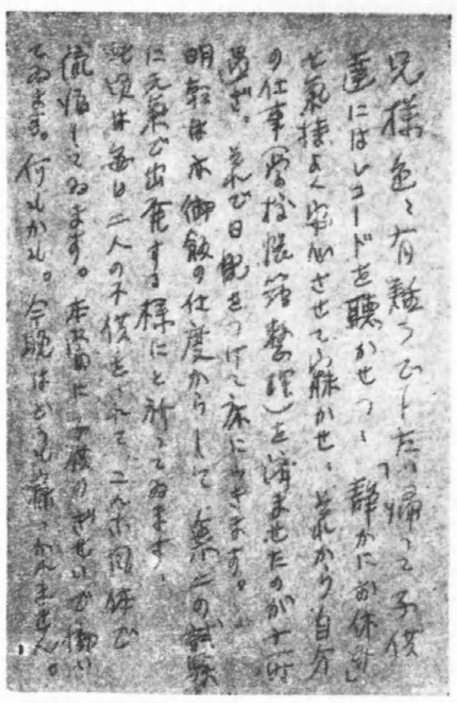
特216
998

# 二宅訓導を語る

昭和五十九年 一月 慶大文学部 南図



きとの選入院術藝
東岩太郎氏に寄せたはるがき



今春四月俊信氏に寄せたはるがき

# 目次

三宅利一郎君を生んだ郷土……一
幼年時代……六
腕白時代……七
少年時代……一二
教壇第一歩……一六
養家の郷土……二二
木積の神社佛閣……二五
父母と兄弟……二九
實兄　西田俊信氏……三一
實弟　正美氏……三五
美望に堪へない兄弟愛……三七
教育界二十年……三九
名譽慾に恬然……四五

三宅訓導の教育界に對する識見……四九
趣味豊かな人であつた……五三
家庭と日常生活……五七
子　煩　惱……六二
死をもつて反省を促がす……六五
何故自殺を遂げたのか……六六
雷同のため生命を提供した堀木夫人……七四
堀木氏と三宅君の關係……七六
自殺した日の模様……七七
三宅利一郎君の偉大を示す盛葬……八八

# はしがき

貝塚東小學校訓導三宅利一郎君は昭和十四年九月二十一日の朝八時すぎ○を嚥下して突如自殺を遂げた。

三宅訓導自殺の訃音一度傳はるや、泉州の教育界に電擊的の衝動を與へたまた世人も極度に驚いた、當時は恰も府議戰が白熱化してゐた時であつたから例によつて世間は選擧の噂で隨分喧かましかつたが、三宅訓導の突如こした悲慘な自殺を新聞紙は三段抜きの初號見出でしかも寫眞まで挿入して大々的に報道したので話題の中心となつて選擧の話なんかは消し飛ん

でしまつた。

あの明朗なそうして勝氣の先生は何故自殺したのかと極度に驚いて驚異の眼を刮るものが多かつた。或者は教育界の革新の犠牲だつと正しく批判した、或者はいやそうでないらしいと如何にもまことしやかに云ひふらすものもあつた、三宅君の自殺の眞相を知らぬ人達は揣摩臆測して自分の得手勝手な觀方と考へ方をして面白半分に批判した。

私達は世間は何んといふても人の口には戸は立てられぬ世の喩へのとほり何なりと自由に熱を吐いてゐればよい、何れは眞相の判明する時宜も來でゐめらうこその日の最も速やかならんことを神かけ祈つて止まなかつたのである。



しかるに私達の念願は完全に裏切られてその後益々盛んにデマが亂れ飛ぶ、甚だ怪しからんことでこれには何か曰く因縁がありそうだつと思つてデマの震源地を調へて見ると意外にも三宅君の先輩や友人の某々らの口から放送してゐることが判明した。

いつたい彼等は何故に良心を殺し、友を賣り、世を僞むいてまで嘘を云はなければならぬのか、言はずと知れた、彼等は時の權力者に媚び保身術の強化をはかつてゐるのである。

別段私達は彼等に親友のためだからとて鷺を烏と胡魔化せとは要求しない、虚僞なことまで言つて三宅君を庇護してやつてくれといふやうな無理な註文はしないが、ただ事實は事實として眞相を正直に云つてもらいたい

のである。

三宅君の教育界革新の主義主張は彼等は千萬知つてゐる筈であるにかゝわらず、誰一人として三宅君の死を意義あらしめてやらうとするものは出て來ないのはなんとしても遺憾の極みである、それどころか却て蔭口を利いて權力者に媚びんとしてゐる。

然し三宅君に事實不純なものがあれば如何やうに激しく罵るも、また妨げないが、嘘八百を並びたてることは實に怪しからぬ、だからその罵りたることについて飽までも責任を持たせなければならぬ、然らざれば始めより默せよ、けれども彼等は責任を帶びることを嫌ひながら三宅君の死の主因に對してつべこべと物申し故人を譏り、そうして傷け得々としてゐる、何



ぞその卑劣な根性、彼等は何故公然名乘つて責任を帶びざるか、責任を帶びて萬死且つ辭せざるの慨あれ。

こういふ風であるから誰一人として故人のために奮然と起つてその拭ふべからざる汚名を雪いでやらうと云ふものがない、何んと情ないことではないか、これでは三宅君の靈魂は浮かばない、いや三宅君は成佛が出來ない。

諾し、誰も書かなければ俺は書こう、俺も三宅君の友人の一人だ親友を犬死させたくはない、奮然と起こう、起つて友人の難に赴こう、事實の上に立つて言ふべきことをハツキリ言つてやらう、そうしてあらゆるデマを爆擊してやらう、粉碎して上げて畏友三宅利一郎君の汚名を綺麗さつぱり

と清拭して上げやう、これは唯だ故人のためだけでない、前途洋々たる遺兒たちの名譽のために書こう。斯くすることは友人としてとるべき最善の方法である。

友人は樂しみある時は自からの樂しみの如く喜び、苦しみある時は共に慰め、慰めらるのは眞の友人であろ、かくして共に幸福に世の中を送るはみな朋友の賜ものである。

殊に三宅君の場合はなほ更にあらん限りの友人の誼みを傾倒して跡仕末をしなければならぬと信じてゐる。

斯ういふ譯で私の持まへの癇癪玉がムク〳〵と込み上げてきて書いたものは此の一書である。

何分俄かに筆を起し一氣に書き上げたものである、それだけ案外杜撰なものになつたことは本書を讀まる人たちにはまことに相濟まぬことゝ衷心お詫をしたい

昭和十四年十一月

故三宅利一郎君の四十九日の命日

原　靜　村　識

# 故三宅訓導を語る

原　静村　著

## 三宅利一郎君を生んだ郷土

故三宅訓導は今ま大阪府下において模範村として輝やく泉南郡南掃守村大字下松に生れたのである。

南掃守村はもと掃守郷にして、掃守は蟹守の轉化にして舊郷名は和名抄に『和泉郡掃守』と載せられ、掃守は蟹の故事に出で、古語拾遺に『天祖

彦火尊婢海之女豊玉姫命生激尊、誕育之日海濱立宮、干時掃守連遠祖天忍人命供奉陪、作蟹掃蟹仍掌舗設、遂以爲職、號日蟹守、今俗謂之掃者彼詞轉也』と見ゆるのは即ち今の加守村である。

又姓氏錄和泉國神別に『掃守連振魂命四世孫天忍日命之後也、雄畧天皇御代監掃除事賜姓掃守連』と見ゆる掃守氏の所にして鄕名は之より起る。

明治二十二年四月一日町村制の施行に際し、加守、西之內、下松、上松尾生、三ケ山、新田の各村は地形民情共に合併するを便として其の區域によつて一村を設け、其の地は舊掃守鄕の東南部に位置して居るので其の意を採りて南掃守村と名づけ、各村は其の大字となり、南郡の所屬であつた明治二十九年四月一日泉南郡に屬したのである。



大字下松はもと掃守鄕松村の里と稱した、『夫木』に

春秋は多く積れと年を經て
常盤に見ゆる松村の里

と見えるのは實に當地のことである。

當地は往古隣村尾生と共に藺の產地にして藺笠を造つてゐた、延喜主計式に『和泉國藺笠四十枚』と載つて居る。

**鄕土の寺院**　淨福寺は字射場にあり、佛法山と號し淨土宗西福寺末にして阿彌陀佛を本尊とし創立の年月日は詳らないが、同寺の記錄によると寛永五年僧圓譽の中興にして松村の里淨福寺云々とあるから德川時代の創建であることだけは確かである、字八坂に往生院と言ふ草庵があつたが當寺

は所謂本山の公許寺でなく淨福寺の隱居所のやうなものであつた、明治の初年頃まで現存してゐたが維新直後に廢寺となり今は唯だ寺跡のみが殘つてゐる。

亦名所舊跡としては當村の東字イシキに筆塚と硯塚とがある、これは共に和泉式部の筆と硯を埋めた所である。

下松は岸和田市の隣接地であるので文化も速く咲き初めて近代的工業は浸潤し、昔の俤が段々と姿を換へ行くが未だ〳〵古風で依然として素朴な如何にも平和な農村らしい俤がある。

三宅訓導を生んだ鄕土は今ま野も山も川も靜かに呼吸して居る、折々田の面を渡つて來る茅渟の海の風は海と山と野の呼吸する息とも思はれ、其



濃綠の肌が太陽を照り映ゆる樣は野と山の微笑とも取けられて嬉しい、轟川の淸流は淙々として靜かに流れてゐる樣は永遠平和な胸に收めてゐるやうに考へられる。

氣候は温和で天淸く大氣淸澄で充滿してゐる、天も地も黃金の色となして田の畦には名きへ分らぬ草花が已がじゝに咲き亂れ、コスモスが家一杯に繁つた茅舍の庭に立つた無心に眺める手足に豆作る女房炊煙立ちこめ轟川の淸流に臨む聚落、田の畔に草を喰む赭牛、淸流に伏して衣を洗ふ染絣を着た娘さんの純情には少なからぬ心を傷める、それらの一瞬にして轉變する光景は實に羨ましい農村氣分の豊かな景色、まことに悠揚たる寬懷に人を親ましめる。

斯うした刺戟のない平和の靜境に教育界の革新の意氣に燃ゆる三宅利一郎君が生れたのは『世の中は奇蹟の連續だなア』と言ふ感を深ふする。

## 幼年時代

### 其ノ一　出生

君が初めて此の世の光りを見たのは、明治三十年三月六日、西田楠松氏の二男としてゞある。

西田家は代々七右衛門と稱し當村第一の舊家を以て鳴り、其の遠き源が詳らないが僅に菩提寺淨福寺の古文書に

寶永三年九月二十四日

心譽念西居士　七右衛門　五十八才

とあり、これ以前の舊記口碑に乏しく、ただ七右衛門は下松で一番舊家であると言ふ口碑に傳はるだけである。

當家は世々農を以て本業としたが舊岡部藩主と密接の關係を有し苗字帶刀を許されて藩邸に出入し、町人ながら中々羽振を利かしてゐたやうであつた、當時の勢力を物語る數々は西田家の家寶として現に保存してゐる。

### 其ノ二　腕白時代

利一郎君は獨り歩きをするやうになり、やがつて小學校へ通ふ頃は負け

ず嫌ひの利かぬ氣の校内きつての腕白者だつた、學校から歸ると鞄を投げ捨てるなり外へ出て年上の男の子を相手によく遊んだ、犬を追ふ、石合戰をする、鬼ゴツ子をする、近所隣りの子供と喧喧をする、田の畔に花をつむ兒の群へ惡戯をする、泣かされた兒の兄姉が仇討に來る、負けぬ氣の利一郎君は年上の男の兒の腰にしがみついて爭ふた、そうして唯の一度も泣き面をしたことがなかつた、剛情我慢な子として村の評判であつた今でも挿話の一つとなつてゐる、鄕土の友人たちの話によると

『どうして利一郎君はきかない何つてお話になりませんでしたよ、誰が何んこいつたつてお父さんよりほかの人のいふことは少しも聞かなかつたものです、それでも奇體に學校は何時も一番でした』



と語つた。

村の小學校を終へると、直ぐ隣町の岸和田高等小學校へ入學した、向學心に燃ゆる利一郎少年は學業せつ〳〵と勵んだ、風雨寒暑を物ともせず四ケ年の間一日半時とたりとも欠かさず通ふた。

天が君の勵學、靜修を御嘉納せられ、首席の榮冠を得て千龜利城の櫻花は正に開かんとする十四の春に、卒業式は午前九時開式の振鈴と共にみんなは各受持の先生に導かれて講堂に整列した、數十名の生徒がきちんと整列した前に十何人かの先生が各々生徒に氣を付けの姿勢をとらせると遙かに靴の音がして校長先生が見えられた、いと靜肅に列んでゐる生徒と先生を一わたり見渡しながら軈て壇に上り一同の敬禮を受けると嚴かな口

調で開式の辭があつて後、今後の奮闘努力、私滅奉公の言葉とを與へて壇を下りた、此の刹那である、利一郎君の若々しい心臓が躍つた、

『あゝ人間何でも人の頭たらねばならぬ、自分もこれから大いに奮闘努力して何んでも人の頭にならねばならぬ……』

卒業證書を抱いて校門を出た君は、兩親と令兄俊信君に報告した、翌朝村の東に老樹聳え立つ狐塚の丘上に佇んで自己の行末を考へた、金剛、葛城の靈峰より金色の太陽が脚下の山野を美はしく壯嚴の裝もつてぐん〳〵と空へ〳〵と昇るのだつた、眞に壯美の上に超越して至大至高の神靈を體表する趣があつた、之れを拜した利一郎君は思はず目に感激の涙を湛ゑつゝ心に叫んだ

『あゝ、今小學校の校門を出て新たなる社會に進むべき自分は將に此の太陽の如くであらねばならぬ、此の英姿の如き強き力を以て、そうして社會を獨自濶歩せねばならぬ、俺は教育家になる、教育は國家の大業である、その消長は直ちに將來の國運に關す、教育家ほど崇高偉大な天職はない。俺は斷じて教育家になる。教育家に。そうして兒童を此の太陽の如き普遍的愛を持ちて。此の太陽の如き盡くるなき慈愛を兒童に與へねばならぬ。

あゝ太陽よ……

太陽よ……

願はくば卿の如く偉大なる　光ある　全人格をもちて世を導かんとす

る此の小童の今日以後の凡ての日を護り給へ、余がために行手を照し
たまへ……」
と宛ら演説する如く胸一ぱいの希望と、歡喜に、涙を流しつゝ絶叫するのだつた。

## 其ノ三　少年時代

一生を育英の事に捧げんとする固い決意に燃ゆる利一郎少年は、どうしても中學校を經て師範學校を卒へねば此の目的は達せられぬと知り、高等小學を終へて二三日過ぎて或る晩、夕食後、きちんと膝を折つてお父さんの前にその志望を申し述べた。

當時の地方人の思想は百姓には學問がいらん、學問をさせたら百姓を嫌がるといふので大抵の家庭の子供は村の學校だけですまし村でも中流以上の家庭でなければ高等小學まで進ませなかつた、こういふ風であつたから學業が終ると直ぐ野良仕事に放出した　勿論西田家も多分に漏れず小學校だけで終らす考へであつた。

お父さんは

『お前の希望はよく解つてゐるが　家の方も人手がなくつて困つてゐる折だから百姓をやらそうと思つてゐる』

と、中學校へはいることは餘り氣乘りはしなかつた。

此の時、襖一枚奥で讀書をしてゐたのは利一郎少年の令兄俊信君（西田

家の當主）だつた。弟利一郎少年の藪から棒の話には一度ビツクリしたが弟想ひの俊信君は利一郎の將來のことを沈思默考しながら父の返答如何とはら〳〵しながら耳をすまして聞きこんでゐた、その瞬間、俊信君は斯う決心した、

『よし、共に父に賴もう、そうして明日から俺は弟の分と二人分働こう、俺は西田家の相續人だからしかたがないが、弟たちだけは十分教育をつけてやらなくてはならぬ、これからの時代は教育のないものは世の落伍者だ』

と、骨肉愛のあらん限りを盡して雄々しく立ち上つた。

俊信君は兩親の前に額いて涙を垂れて利一郎を中學校へやつてくれと嘆願した、兩親も初めのうちは否と拒絶したが、兄弟たちの餘りに熱心に懇願するので心が動いた、一旦言ひ出したら斷じて後に引かぬ利一郎少年の氣性をよく知つてゐた、何事でも目的を立てると貫徹せなければ止まず、飽迄頑張る子であることを知つてゐた、また餘りにも堅い決心に兩親も同意を與へざるを得なかつた。

兩親の快諾を得た兄弟は手を取りあつて喜んだ、兩親にお禮を述べて二人はあの廣々として青苔蒸した庭園に面した書齊に引き上げて來た、照りもせず、曇りも果てぬ春の朧月夜に兄弟は恍として無盡の境に遊ふ想ひで將來を語り合つた。

斯くして利一郎君は岸和田中學校に入學試驗を受け、首尾よく合格して

之に入學した、大正五年の春、岸和田中學校を卒業、更に進んで府立池田師範第二部に入學、同六年の春、卒業したのである。

## 教壇第一歩

三宅君は卒業と共に、當時教員拂底であつた所から、岸和田城内校に教鞭を執つた、拜命して登校した第一日、始業の鈴と共に兒童は皆講堂に集つた。

やがつて整列されると、校長の紹介で先生は壇上に上つた、瞬間、先生は無限の感慨に暫し言葉も出なかつたといふ、げにさもあらう、顧れば七歳の昔、岸和田高等小學校長の英姿を仰いで、小さな胸を躍らした自分ではなかつたか、今、當時の理想の一端は達せられて兎に角、自分が此の壇に立てるの人となつてゐるではないかと、若き肉の血を躍らしつゝ感激した口調で挨拶の辭を述べたのたつた。

當時城内小學校には覇氣滿々たる名校長として盛名を馳せた田中義者氏がゐられた、元來氏は豪放膽大な古武士的肌の男であるのに、部下の教員は所謂、『學校の先生』氣質の意氣地ない者ばかりだつたので、語るに足る部下なきを獨り託つてゐたのだつた、そこへ負けず嫌ひな、燃ゆる樣な意氣と天地を呑まん覇氣を有する若い三宅利一郎先生がはいつたので、田中校長の喜びは一方でなかつた、田中氏と私は親交があつたので屢々親しく語る機會が多かつた、談たま〳〵教育問題に移るといつも氏は「新任の

西田君（當時は西田性であつた）は聊か語るに足る』と話されたことがあつた。

こういふ風な間柄であつたから田中氏と西田君は大いに肝膽相照らした斯くて三宅先生が理想の教育界に踏み込める第一歩において早くも名校長田中氏の知遇を得たといふのも、畢竟するに先生の抱負才幹共に同僚を超越した所謂、鶏群の一鶴たるべき異彩を放つてゐる爲であつたのであらう

三宅君は此の若い時代において、既に超越的人格の閃きがあつたのである、當時しかもかけ出しの先生たるに拘はらず、校長の厚き信任の下に新しき教育思潮の種子を植ゑ付けてゐた。



## 三宅家の相續人となる

その頃、貝塚町木積（舊西葛城村）に三宅馬治郎さんといふ篤農家があつた、三宅氏はその郷土に名門として輝やく三宅九郎平氏の令弟であつて本家の九郎平氏は村内の有力者で村の名譽職は何一つとして缺かしたことのない有力者であつた、その令弟として生れた馬治郎氏もまた兄に劣らぬ德望家で郷人をして一見崇敬の念を生せしむる人であつた。

本家九郎平氏には立派な男の子があつたが、家も富み榮ゑて裕福に何不自由なく暮してゐた馬治郎氏には娘二人で四十の坂を越してゐたが世嗣の男子は無かつた、馬治郎氏としては何よりの惱の種であつた。

長女ミツさんは泉南高等女學校を卒業して泉南郡熊取尋常高等小學校に教鞭を執つてゐた頃、もう年頃であるので何つか善き配遇者をといふので四方八方に物色したが何れも帶に短かし襷に長しで理想的な婿殿が見つからなかつた、或時ふとした機會に西田家の話が出た、馬治郎氏は喜んで西田家のことを各方面で聞合して見た、西田家は血統も良し、資產もあり、本人利一郎君も申分のない人柄であることはハツキリ判つた、そこで馬治郎氏は媒介者を立てゝ西田家に交渉した、先づ將を射んと欲せば馬を射よの戦法で君の兩親を頻りに說いた、楠松氏夫妻は馬治郎氏の餘りの熱意に動かされて、利一郎君を養子にやることに決めた、しかし當人は、こんな話が双方で進められてゐるといふことは神ならぬ身の知る由もなかつた、利一郎君は相變らず、熱誠兒童教養に精勵してゐた、決めてから楠松氏は三宅家の懇望を告げて養子に行けと攻め付けた、養子に氣は進まないけれども、兩親の命なら是非もなしと孝心の深い君は大正十一年四月一日ミツさんと結婚して三宅家の第二世となつたのである。

三宅家の人となつた利一郎君は教務は終るや直ちに歸宅し洋服を野良着に着替ゑて田畑に出で養父馬治郎氏の最も善き助手者として倦まなかつたまた勉强好きの君は月冴ゆる秋の夜半も風凍る冬の曉まで燈火の下に屢々鷄鳴を聞いた。

慈眼愛腸の養父は君の身を案じて

『身體に毒だ、早く寢みなさい』

と、君の部屋を覗く事もあつた、勉強と野良の手助けは難有いが、身體を痛めて貰つては何にもならないからなアと、養父はしば〳〵忠告した。

また世間では馬治郎きんの所は善い養子を迎へて幸福なことだつと羨望の的となつた。

人の善い馬治郎氏は病魔に犯されて昭和三年五月一日遂に亡くなられた若し養父が今日まで生存してゐられたならば利一郎君も今度のやうな悲惨な運命に誘はれなかつたであらう。

## 養家の郷土

木積は泉南郡の南端に位し、後には一帶の翠巒の葛城連峰の屏風を樹てみどり濃き木立に圍まれ、山や河の眺めにめぐまれ何のわずらいもなく解放されて、ゆつたりとおちついた土地である。

町の中央を流れる蕎原川の景觀は實に佳い、殊に三宅家の直ぐ下に架せられた南山橋あたりの景觀は迚ても筆舌に盡せない、絶壁の谷底を澄明な水は淙々として流れ河底の石は一つ〳〵と數へられる、こゝから少し上つて行くと幽潭寒き懸崖の中腹に巨龍のやうな老松が碧い水面に差し伸べて角を振り牙を怒らす物凄い削巖が併立し薄暗い深淵に凝然と淀み湛へられてゐる、碧い水が河中に跪伏する岩層と石塊に激して奔雷の轟くが如く激湍となり崩れ迸り狂ひ飛瀑となつて碎け散り奔落し壯洌水煙を揚げながら水は石を嚙み、石は水を搏ち、水叫び石嘯き、珠玉迸りて雪花灑ぎ雜樹蔚

蒼のなかに鋭い胸骨を突出して屏出する絶壁は全く鬼氣迫る神秘境である若葉の頃には全溪は深山つゝじ、黄金色の山吹が氣品の高い清楚な姿、この季節から秋にかけて黄と紅と紫と陽光に交錯する情景が清流に反映して心ゆくまで慰安を與へてくれる、この千姿萬態の奇絶の蕎原川が實に大阪附近では稀らしい景觀である。

因に木積の村名の起りは、行基菩薩が畿内に四十九院を建立するに當つて木島の杣山よりその用材を伐り出し、その用材を當地に積んで置いたことにより木積の名が起つたのだつと傳へられてゐる。

## 木積の神社佛閣

**西葛城神社** は字下出に鎭座ます、もと深谷神社と稱し、大國主命及び菅原道眞公をお祀りしてある。

**觀音寺址** は同字にあり、寺は聖武天皇の勅に依り行基が七堂伽藍を建て自作の觀音像を安置せし所である、桓武天皇は寺領千七百石を寄せ給ひ寺門大いに隆盛を極めたが、足利時代に山名、大內氏等は足利氏に叛きて紀泉の地に戰ふに及んで佛堂六宇、僧房二十餘宇は灰燼に歸した、降つて天正十三年豊臣氏の根來寺攻めに際し、復たその兵火に罹り僅に觀音堂の一宇を殘した、德川時代に至つて岡部侯は往古の正しき由緒を惜み、寺領

を寄附し永代修繕の資に充てられ、また庫裏、鐘樓を造營したが、安永以來惜くも頽破し、數度の營繕に寺領を悉く賣拂はれ、嘉永以後は全く目も當られぬ廢頽を來し、明治二十二年遂に廢寺となり、堂は大正三年一月孝恩寺に合併せられたのである、今、世に名高い國寶釘無堂は實に此の堂宇である。

**孝恩寺** は同所にあり、慈眼院大悲院と號し淨土宗智恩院末にて阿彌陀佛が本尊である、同寺は國寶の名畫什器は多數あり。

**蛇谷城址と池尻壘址** 現今は僅に址跡のみ認むるのみ、共に松浦氏の據りし所であつて、里傳に依れば、松浦氏は當城壘に據りて、岸村（現今岸和田市）和田新兵衛高家と協力して南朝に味方した、岸和田城より當城に至ずる當地に峻坂があり、之を城の坂と呼んでゐる、また坂の麓に楠本稲荷と稱して稲倉魂神を祀れる小祀がある、老楠樹の下に鎭座ましますので楠本稲荷と稱したのであらう。

社前に二本の杉がある、參拜者は馬をその木に繫いで參拜したので馬繫の杉と呼んでゐる、松浦氏は正成公の陣歿を深く歎き追慕の念に堪へず當社の側に一社を創建し、正成公の靈を祀りて楠明神と崇め奉つた、明治四十三年西葛城神社に合祀せられた、松浦氏は子なきを憂いて、靈驗顯著な楠明神に祈願し神の御告げで一子秀王丸といふを得た、後に當城は足利氏に陷落せられてより、松浦氏は主從僅に十數名で隱畑といふ要害を守り或は大門上といふ所に轉據した、秀王丸は成長し松浦八郎左衛門と稱し、楠

神社の守護を當地の人々に托し、その身一族郎黨を率いて河内の楠氏の軍に從ひ建武中興の大業の柱石の一となつた。

以上は三宅君の鄕土の環境と名所古蹟とそうして由緒正しき神社佛閣の一部を書いたのであるが、まだ〳〵廣く深く探れば枚擧に遑がないが、本書の目的は、三宅君の人物を物語るのが目的であるからそれを省いたのである。

此の悠然とした空氣の透徹、あの爽快な感じは他に求めるも多くその比儔を見ない、朝夕の凛とした大氣の壓迫は俗塵を拭ひ去つて自然の威嚴に襟を正さしむるものがある、況して春夏秋冬、四季折々の雲雨の變化、草木の姿態、其處に山村特有の聚落美と崇高とを見ることが出來る、深林美に圍まれた、三宅君の邸宅、何といふ親しみあることよ、こうした自然美は三宅君の心を捉えて、のび〳〵とした爽快な氣持を味はふことが出來たのである。

世間の一部で君は激情家であつたとか、或は變質者であつたとかといふものもあるが、決して激情家でもなければ變質者でもなかつた、極めて冷靜な自然美を愛する方だつた、それはこうした山水の清に生れ育つたからであらう。

## 父母と兄弟

利一郎君は兄弟總て五人、兄俊信氏は西田家を相續し。弟洲一氏は岸中

を經て、廣島高等師範在學中病を得て、昭和三年九月六日歿せらる。次弟正美氏は岸中を經て早稻田の商科を卒へ目下淺野スレート株式會社販賣課長心得の重職にあり。妹あいさんは同村五三七に分家してゐる。

嚴父楠松氏は區長などを勤めた村の有力者にて、謹嚴剛直の人であつた昭和二年十月二十四日歿した。

母堂花さんは鋭意家事を整理し、一意四男一女の掬育に膺られ、謹淑の譽高く子女の育英に就ては最も留意せられ、指導訓育に常に心を千々に碎いてゐた、また夫君をして內顧の憂なからしめた近代稀れに見る賢母であつた、昭和二年十一月十三日歿した。

## 實兄　西田俊信氏

氏は楠松氏の長男にして明治二十八年六月十一日生れである。

氏は溫厚穎敏明達の士にして頗る先見の明に富み、年少早くも實業界進出を念願し、その第一歩として泉州機業界の一方の雄として知らる泉一綿布株式會社に入り、氏特有の明敏なる頭腦と機敏な商才を以て奮鬪努力し株主及び一般世人の認識するところとなり、遂に同社專務取締役に累進し、その後同社を辭し西田人絹工場を創立し現在に至る。

同社は優良品を製產し、しかもその商取引は堅實を以て夙に業界の白眉として普く鳴り響いてゐる。豊かなる商才と明朗なる天禀は斯界の絕讃を

浴び現に同業組合理事の要職に在り。

また政治的識見を有し鄉土愛に烈々たる血を沸らしつゝあれば村民の懇望に依り南掃守村名譽助役に就任し、敏捷なる政治的手腕は益々冴ゑ縱横無盡の快腕を揮ひ老練圓熟せる村長、現府會議員原平三郎氏のヨリ良き片腕として住み心地良き鄉土建設の爲め心血を注いでゐる、宜なる哉、同村は全國においても稀れに見る優良村として赫々たる名聲を博せるも蓋し名譽助役たる氏の鮮なる高等政策と明朗な人格に負ふところは偉大である。

亦人の世話を能くする士である、人の世話をするといふことは誰もが好くところであつて、しかも實際の場合に遭遇すると却々出來ないものである、また世話をしても何物かその代償を求むる心の起るのは人情で若し世



話をして遣つたその人が、自分に反く樣なことがある場合、腹立たしく思ふのも亦人情である。

此の點において西田氏の人の世話振りは徹底してゐる、第三者から見るときは、夫れが物好きの樣にも見へ、また氏の道樂かの如く思はれる位に能く人の世話をする、氏の世話振りは恩を着せる心でない、代償を得んとする心も毛頭ない、唯た人の爲め人間は相身互だといふ眞の同情から迸り出づる誠意の發露に外ならぬ。

氏から種々と世話を受けた人々は相當に多い、西田氏は敢て禮を言ふて貰ふといふ心は露ほどもなかつたが、不思議にも氏が世話をした人は何れも成功してゐる、だから、世話を受けたものは氏を非常に德としてゐるこ

とは大したものである。

涙を分析したら唯だ鹽分と水分のみといふ人の多い世の中に、西田氏の如き人間味の豊かな人は實に奇蹟的の存在であると謂はねばならぬ。

こういふ風な人だから骨肉愛に至つては到底私の筆舌に盡せないものがある。

利一郎君はいつも私に次のやうに語つてゐた

『僕の兄はほんとにやさしい、何んでも弟妹の言いふことを聞いてくれる人である、兄の骨肉愛にわれわれ弟妹共は感激と感謝の念に滿ちてゐる』云々

と語られたことはあつた。

俊信氏の弟妹を愛する深きものを見て、私は或時氏に向ひ貴下が弟妹に對する愛の厚きに過ぎざりしやを問ひたるに對して、俊信氏は言下に自分の弟妹を愛するは兄として自然の情にあらずやと答へられた。これを以て見ても氏の骨肉愛の如何に深厚であることが窺ひ知ることが出來るではないか、而して弟妹たちも兄に對して善く弟妹たるの本分を守り、嘗てその命に違背あるやうなことはなかつた、實に世の人の兄弟愛の模範とするに足るものがある。

## 實弟　正　美氏

氏は楠松氏の五男にして大正元年九月六日生る、昭和五年岸和田中學校

卒業後、早稲田大學專門部商科に入り同校を最優位にて卒業した新進氣鋭の商學士である。

在學中より氏の人物を見こんだ、我が財界の權威、淺野財閥の淺野良藏氏が卒業と同時に同氏が主宰する淺野スレート株式會社に招聘せられた、入社以來その豊かな商才を發揮し快腕を揮ひ、寧ろその手腕に凄味ありとまで同業者に驅はれてゐる、だからグン〳〵と翼足を延ばして入社日なほあさきに拘らず多くの同僚を後目に早く販賣課長心得の重要な椅子を占めてゐる、灰聞するところによると課長にと言ふ話もあつたのだが、何分二十八歳の青年ではといふことから人物に不足がないが歳に不足があつて一二年は課長心得でといふことになつてゐるそうである。

現代的の教育を受けた人は理性の一方にのみ偏して感情の或る一面を忘却する人が多いやうであるが、正美氏に至つては實にその兩面の完備した近代人において求めて得難き典型的の青年紳士である、

前途洋々たる氏は近き將來に大いに成すあらんと、吾人はその期の速かに來らんことを衷心祈つて止まないのである。

## 羨望に堪へない兄弟愛

以上は三宅利一郎君の父母兄弟のあらましであるが、何れも人格、手腕識見、力量に到るまで寸分の隙のない、誰か烏の雌雄を知らんと言ひたくなるほどに酷似してゐる。

兄は弟を慈愛し、弟は兄を尊敬し、何れも十指の如くに愛し愛され、斯くして、兄弟の間は恰も戀する男女が神秘的の魅力を持つてゐるやうに戀愛至上のものは男女互に正しく相識ることだつといふと同様に最上の兄であり、最善の弟であり、妹であるといふ合理的認識に基く魅力を持つゐる兄と弟とは逆上したる變態的の戀愛でなく、愛すべき所以を自覺して戀する兄と弟となつてゐる。

天日下には兄弟相喰ふ醜輩も見聞す、夫れのものは往いて聽け…

西田家の兄弟愛



## 教育界二十年

「幼兒は成人の父なり」とは湖畔詩人ワアズワスの口すんだ詩の一節である、洵に古吟の名言である。

一國の興亡はその國民が兒童を重要視するかしないかに依つて定まるといふても過言でない、古來雄大なる國家を建設した民族は何れも深く兒童を愛護しその教育に盡した、即ち兒童は單に頑是なき可憐なものとして戯な甘やかす相手ではなく實に將來有爲の民族的相續者として天使として嚴肅な氣持を以てこれを敬愛し教育すべきものである。

愛する以外に更にこれを尊敬する念を以て愼重に薫育することが兒童に

對して持つべき最も緊切なる不斷の心掛けでなければならぬ。

彼の老牛が犢をなめるが如く、只徒らに他愛なく愛撫するといふが如きことは決して眞に兒童を大切にする所以ではない。

斯の如き見地に立つて兒童の教育に私滅奉公至誠のあらん限りを盡され溢るゝ如き溫情を有ちその學識と共に多數の生徒より慈父の如く敬慕されつゝ三宅利一郎君は二十年間教鞭を執つた。

その間に一度退職したが、直ぐにまた教育界に復歸した、君が在職中に岸和田市、泉北郡、大阪市、泉南郡へ轉任してゐる、これを見て、君に何か缺點があつたから轉勤したかのやうに言ひ觸すものもあるが、私たちは三宅君に限らず誰にせよ轉勤したからとて直ちにその人に缺點ありと斷じない、人事行政の都合で不止得轉勤せらる場合が多い、轉勤即ち缺點ありと斷定する彼等の心事を矜れむものである、彼等の考へ方を押し進めてゆくとたとへ一回でも轉勤あつたものには缺點があつたからだつと言ふことになるではないか、現在の教員諸君の中で初めから終りまで一校で終るものが果して幾人ありやと言ひたくなる。

今の官吏でもそうでないか、長くて一年短いものは二三ケ月位いで轉勤してゐるではないか、これらも彼等に言はせると缺點があつたからだつといふことになるではないか。

君は教壇に立つと立たざるとに拘らず、口を開けば忠君愛國教育第一主義を說き、その熱誠、その愛國心は實に徹底してゐた、何人と雖も一度そ

の所説を聞かば肅然として襟を正さゞるを得なかつた、然り現代日本にお
いても最も必要なんのは國家的觀念である。
非常時克服も畢竟國民精神の中心、戮心協力の氣魂と皇國の本質に對す
る確乎たる自覺とがあつたならば克く國家の危殆を救つて忠愛なる皇國民
の任務を果すことが出來るのである。
我等に取つて國家は我等の宗教である、國民が一切の分類を脱却して統
一せられるものは唯だ、萬世一系の皇室を中心とする日本の國家でなけれ
ばならぬ、即ち國家の本質に目醒めて光輝ある國民獨特の個性に甦り國體
の信念と理想に生きること。
三宅君は斯の如き雄々しき信念の下に日夜愛國の志を失はずしておのが
天職とする國民教育に勵みつゝあつた。
教育は理論に非らず、實行にあり、國民として恥かしからぬ國民を養成
せんとは三宅君の目的とするところであつた。
君は誠を披いて人と交はり、眞情を以て學生に對した、君は學生を教ゆ
るにその言葉を以てするより、寧ろ實行を以てした、凡ての學生を見るこ
と、なほ自分の子女を見るが如くであつた、慈父の愛を以て彼等の上に加
へた、君の敬虔なる、人に對して懇篤なる、職務に盡して忠實なる、その
藹々たる和氣、その溢る計りの愛心、これらのものは教科書以外の教訓と
して、學生の心に深く、その感化を與へたものがあつた、教ゆるもの既に
慈父の情あり、學ぶもの赤子の心あるも、また宣ならずや、

世界一を誇る庄川の發電所の機械を動かす力も、源を尋ぬれば、人知れず流るゝ小川の一滴の水からなるを知らずや、人知れず流された、三宅君の涙が、如何に多くの感化を學生たちに與へたか、教育事業といふものが三軍を指揮する將軍が戰場に揮ふやうな花々しいものでないが、その効果は今年蒔いて明年苅り取り得るが如き容易なるものではない、けれども教育の力は誠に驚くべく、誠に恐るべきものがある、何となれば國運の消長も、國家の盛衰も、その國の教育如何に繫ること決して尠少でない。

君は初等教育の爲めに盡瘁すること實に二十年、君はその初めより終に到るまで、常に變らざる熱心と勉强とを以て幾多の兒童を教へた、導き、誡め、勵ました、私は三宅君が我が國初等教育に貢献したところ甚だ僅少でないと信じ、その感化の甚だ淺からざるを信じ、しかして、またその効果の甚だ尠なからざるを深く信じ、固く信じてゐる。

## 名譽慾に恬然

君は師範第二部を出てゐるのだから訓導の資格を有つてゐ乍ら訓導になるのが割合に遲れてゐた、私はいつか君に對して『君は何故訓導にならないのだつ』といふたら、君はいや代用の方がどれだけ氣樂でよいかも判らない、名譽なんといふものは殆ど念頭になかつたらしい、いつも名利を外に洒々として水の清に流るやうであつた、それでも昭和八年四月訓導に任命されてゐる。

此の訓導問題に就て重里校長は、新聞記者に次のやうに語つてゐる、昭和十四年十月六日、大阪朝日新聞第七面に

『現貝塚東小學校重里校長が、病妻と別居し幼子を抱へて困つてゐる三宅訓導に同情して云々』

と掲載されてゐる、これによると三宅君が訓導になつたのは如何にも重里校長の恩惠的に訓導にしてやつたやうに聞ゐる、當時三宅君は妻女と別れ幼子を抱へて別居してゐたやうなことはない、かりに夫れが事實にしたところで訓導といふ榮譽ある地位は家庭の事情によつてまた一校長の一存で任命すべきものではない、それに拘らず重里校長は堂々如何に恩に着被がましく世界中で俺は一番同情深い男だつと言はぬばかりに如何にも自慢らしく吹聽してゐるのはどうかと思ふ。

また、三宅君は直情徑行の男で、しかも負けず嫌ひの無遠慮の潑剌たる人であつて、相當の識見もあり、辯舌も確かなもので、人と議論する場合でも先づ對手方に充分熱を吐かして置いて、そうして後に要所〳〵にビシビシとキメ付けて行くといふ遣方でその態度も全く小面嫌位ドツシリと落ついてゐた、だから自分に氣に入らぬことがあつたら何人に對してでも何の遠慮會釋するところなく、ズケ〳〵と言ふといふ風であり、上目や先輩に對して阿ねることの作法を知らぬ男であつたから、時に校長や先輩同僚と衝突することもあつた、これが自然に上司の機嫌を損じ或は好意を持たれぬ原因となつたのである。

三宅君は確に信念の人であつた、教育界の革新に就ては燃ゆる樣な意氣と覇氣滿々たるものがあつた。

鍛錬努力に依つて人格を叩き上げて來た男だから、恰も樂繞の樣で枯れてゐたかも知れないが何處かに妙趣があつた、修養を怠つた所謂温室育の自稱天才人は機械製の器具の樣で損所は無いが面白味もなく少し強い相手に出會ふと忽ち腰を折つて尻餅をつく跪弱性を多分に有つてゐる。

沈香も焚かず屁もへらずと言ふ型の先生たちの眼には、三宅君は或は激情家或は變質者と映たのであらう。



## 三宅訓導の教育界に對する識見

歳暮、中元の贈物廢止に就て政府は極力宣傳してゐるが、それでもまだまだ階級維持の美風だつといつて依然として贈物が行はれてゐる、それが階級維持の美風であるそうだ、只だ一つ、どう考へて見ても美風でないのは、學校の生徒が先生の私宅へ盆暮の贈物をしてゐるものがある。

贈物のことを法律では賄賂といつてゐる、生徒は受持先生の所へ盆暮に賄賂を贈らねばならぬとは誠に困つたものだ。

學校は正義人道の人格を修養するところである、但しそれは昔の學校のことで、今日の一部先生たちには正義にも人道にも人格にも少しも關係が

ないといつた風に考へる先生も居る、さういふ先生は平氣で生徒から賄賂を取るのである、賄賂を持つて來ぬ生徒には先生の御氣嫌が惡い、幼ない生徒は盆暮に賄賂を贈らねばならぬと、いふ實物教育を授けられるのである、口で正義人道を説いても、行ひが惡ければ何の役にも立たない、書物を教へる先生が賄賂を取る實物教育を授けたのでは幼ない學生の頭腦はどんなになるかと思ふても嘆息すべきことである。

昔の生徒には元氣があつた、野心もあつた、生徒が先生の私宅を訪問することさへも、因緣情實を作る罪惡だとしてゐた、今日の生徒に意氣がなく、野心がない、哀れな、級長になりたい、一番になりたい、先生にうけがよくしたいといふ現實的虚榮、黄金以外人間の價値あるを知らない生徒もないこともない、虚榮を打破し、眞に人間の價値を尊重せしめる教育とならねばならぬ。

しかし、これは全教育者は皆斯うだつとは決して言はない、一部の教員の中には斯うした先生があると言ふ一例を上げたに過ぎない、いや、一部の先生にでも左樣な事實がないと抗辯するものがあれば私は確かに實在すると斷言して憚らない事實を知つてゐる。

現在の教員は確に薄給であることも事實であるが、しかし、薄給なることは決して賄賂を取る理由にはならぬ、薄給ならば破れた袴を纏い、靴の代りに尻切れ草履を履き、帽子の代りに頰冠でもして登校すれば善いのである、先生に此の元氣があれば國民教育は實に理想の域に進むのである、

賄賂を取つてまで虚榮の生活をしやうとするので、教はる生徒が精神的の不具者にもなるのである。

破れた袴を纏い、尻切れ草履を履き、頬冠して先生が登校すれば生徒は『何故』と疑ふ、その時大いに人間の價値を説くのだ、形式張の政治や上に厚く下に薄い官公吏の俸給制度か、學校の先生を如何に窮せしめてゐるかを語るのである、何故、と疑ふ處より哲學は起り、社會を疑ふ處より改革進歩發達が成就されるのである。

三宅訓導は常に次代の國家を双肩する國民を育成するには智識偏重德育不足の教育ではいかぬ、知行一致を目標とせなければならぬと絶叫してゐた、だから不純なことでも發見すると上司であらうが、また先輩であらうが、相手かまはず楯突いてゐた、斯うしたことは三宅君自身にとつては非常な不利益となり、また榮達の障害ともなり、強力な反對者をつくつた譯だとなつたのである。

三宅君が非常な達識能文であつた、その流暢の文、清新の想、才華煥發の筆を以て教育論叢に毎號寄書して萬人の胸をそゝつてゐた。

## 趣味豊かな人であつた

三宅君は實に趣味豊かな人であつた、とりわけ繪畫に趣味を多分にもつてゐた、そのうちでも洋畫は特意であつた、趣味で畫を描く人も多いが、三宅君の場合は素人放れして、堂々たる專門畫家の領域にはいつてゐた。

凡そ藝術の眞體は大自然神美との融合にある、故に藝術家の誇りとするところは、世俗に超然として悠久無限なる大自然と親しむ事にある。

また藝術を樂しみと誇りとするところは俗息を超脱して無限の神美を探來することであらねばならぬ。

それは物質慾望を去り、邪念を斥け、一切の煩惱をすて、只管に審美の道に分け入る事であつて、然かもその事が自ら渾然として人格に合一するものである事を必要條件とする。

その結果から言へば『作品即人格』であらねばならぬ、故にその代價を考慮の中に置いての作はすでに墮落したものであり、また人氣を博せんとして徒らに粉飾技工を凝らした作は生氣に乏しい。



例へば百圓を以て揮毫の依頼を受けたからとて、百圓程度に筆を揮ふが如きは墮落の作であつて藝術の精神からいへば無價値である。

或は展覽會に出品せんが爲の作であるからとて殊更に技工を凝らすなどの如きは全く死作であつて、活き〳〵した生命はない、假令五十錢の作に就ても、千圓の作に就ても同一の氣分を以てし、全生命を打込んだものでなければ眞の藝術的價値はない。

即ち畫を描くものゝ心境はあくまでも天眞爛漫でなくてはならぬ、また何處までも眞率な感じを表現したものでなければ眞の藝術品として價値は認められぬ、この點になると素人餘技作には實に天眞爛漫であつて藝術に生きてゐる。

三宅君の作品は眞に藝術の中に生き、物質的慾望を去り、一切の邪念を斥けて純眞な態度を以て描いて、苟も藝術の矜持を失ふやうなことがなかつた。

三宅君の作品を私はいつも覺せてもらつてゐたが一番感銘の深いものは大正十三年十一月一日より大阪堂ビルに開催された、藝術院展覽會に出品されてゐた作品である、當時私は堂ビル二百十五號室に事務所が在つたので毎日、展覽會を觀に行つた、多くの出品中に三宅君の作品は燦然と光つてゐた、筆致雄勁一點一線委く生氣を帶び、淡彩の極致の鬼技末尙且つ妙趣を表はし、神韻麗躍如として畫面に浮動する靈妙の作品であつた。

藝術の切賣りする人たちの畫と全く月鼈の差があつた、十一月二日の招



待日に三宅君は招待うけて歸りに私の事務所を訪れて、非常に喜こんでゐた、此の喜びを當時同僚であつた、東岩太郎君のところへも便りをしてあつた（卷頭寫眞版參照）當時三宅君は岸和田市東光尋常高等小學校に教鞭を執つてゐたと記憶してゐる。

## 家庭と日常生活

三宅君の家庭は、養母サイノ（明治八年生）さん、ミツ夫人（明治三十年生）、長男洋一（大正十二年生）、長女芳子（大正十四年生）、二男集二（昭和二年生）君等である、洋一君は病弱の爲めに村の小學校だけで今は家事の手助をしてゐる、芳子さんは大阪梅花高等女學校、集二君は岸和

田中學校に在學中である。

資產は田地一町五、六段歩と他に畑と山林を有し、邸宅は田舍に稀らしい建築美を誇るものだ、町でも中流以上の生活を營んでゐた。

養母は山家育ちといつた風の人で金錢問題にかけてはなか〳〵拔け目のない方である、だから彼女に對して街の噂は餘り芳ばしくはない、ミツ夫人は泉南高等女學校出身で若い時分には教職に在つた婦人であるから教養の點から言ふと婦人としては有識階級の方である、夫人は性來體質は虛弱の方で兎角健康を缺き常に藥餌に親しむの狀態であるから、自然家政の萬端は經濟思想の極端に發達した母堂が切盛りをしてゐた、病弱の故で夫君に對しても自然怠り勝ちであつた、夫人は家附の娘であるから氣儘者であ



るとか、或は嗅天下なるが故にと言ふ譯でなく病弱のために氣持の上においては、斯うもしたい、あゝもせなければ夫に對して相すまぬといふ位のことは知つてゐたのであらうが、如何に心は逸つても殘念なことには病氣のために肉體は自由自在に動かない、思ふ存分に至眞の妻になり得ず、世の妻の如くに痒ゆいところに手が屆かなかつたのだ、此の夫人の苦痛を知らぬ世間の人は『三宅の妻は名ばかりの妻』であると陰口を利くものもあつた。

病妻を得た利一郎君にとつては此の上もなき不仕合であつた、いや、利一郎君だけではない、夫人や愛兒たちのためにも最大の不幸である。

病妻なるが故に利一郎君は家庭では隨分人知れぬ苦痛を耐へ凌んで來た

朝は午前五時前には必ず起床し愛兒たちの食事を整へ通學の準備と家庭の整理を終へて登校し、教務を終へて歸れば、また翌日の準備に忙しかつた木枯が吹き荒んで村と言ふ村は乾き切つて蕎原川の水は凍つた冬の夜半に歸つても誰一人起きて居らず冷飯を嚙つて淋しく寢なければならぬ夜は幾夜も續いた、出勤するに際しても心よく笑顔を以て見送つてやるものもなかつた、一日教務に疲れて歸つても、笑顔を以てその勞をいたはり、笑顔を以て心よく迎へてやつて呉れるものがなかつた、送るに笑顔を以てし、迎ふるに心よく迎へたならば、利一郎君はどれだけ喜んだことであらう、良人が歸宅しても機嫌も取らず、慰めもしなかつた爲めか、時には歸宅して不機嫌なこともあつたでらう、三宅君も人の子だ、感情の動物だ、それは無理からんことである。

今春四月に實兄俊信氏宛に出した、はがき（寫眞參照）を見ても君の氣持が現はれてゐる、君の氣持と家庭の事情を悉知するわれ〳〵ば此のはがきを見る毎に

モ一度逢ひ度くなつて來る、
逢つて聞きたいことがある、
逢つて慰めて上げたいことがある、
逢つて冷る切つた魂をしつくりと温めて上げたい、
オイ……三宅何故死んだのだ、
死よ、何故三宅を奪つたのだつと、君の胸中を知る者、地に伏して號泣

し暗然として双袖を絞らしむる。

## 子煩惱

山は燒けても山鳥は立たぬ、子を思はぬ親はないとは實に千古不滅の古諺である。

子を愛せぬ親はないが、三宅君の子煩惱は又格別であつた、その愛しかたは決して舐めすゝるといふやうな愛し方でなかつた、善惡を識別しての愛し方であつた、在世中唯一の樂しみは只だ三人の子供の成長のみだつた自己に如何なる苦しみがあつても一切子供の犧牲だつと言つて耐へ凌んで來た、敎務の餘暇には愛兒を伴ふて散步するのが君にとつては何よりの樂



しみであり、慰安であつた、今夏の暑中休暇に集二君を伴ふて北攝の靈峯六甲山に遊んだ、六甲山は海拔三千尺、山は花崗岩第三紀層英班岩から成つてゐて、樹木が尠いため茶褐色に風化し山膚が處々に現に見られる山である。

三宅の父子はその夜六甲山上ホテルで一泊した、眼下に水盤の如き茅海紀泉の翠巒、渺茫とした山色大に連り、金剛葛城の諸山、屹立雲表を摩す奇絶なる景觀に見惚れ、夜は亮然たる月下に利一郎君は集二君に六甲の山の傳說を說いて聞かした、

當山は神功皇后が三韓から凱旋の時、應仁帝の庶兄カゴ坂、忍熊の二王相謀りて、皇后を打たんとしたが、武內宿禰がカゴ坂王とその隨臣

五名を誅して、その兜首六級をこの山中に埋めたので六甲の名が出來たのだ。

又、呼べは應へんとする眼下に見ゆる神戸港は年額十餘億圓を呑吐して世界の貿易港である、その面積は五百六十七萬九千五百八十七坪にして疊を敷き詰めれば一千百三十五萬九千百七十四枚と云ふ天文學的數字に啞然たらざるを得ないではないか、

と、森閑として人聲なく、只だ犬の寢息のみ聞ゆる靜寂の別天地に夜の更けゆくのも知らず父子は語り明した。

此の樂しかつた人生最大の愉快な旅も、集二君にとつては今は想ひ出の旅であり、父と永遠別の旅となつたのは悲しいことである。

## 死をもつて反省を促がす

自殺は惡の極致である、われ〳〵の生命はわれ〳〵のものであつて、又われ〳〵のものでないのである、われ〳〵は身も魂も强健に保持して命のつゞく限り至大至高の國恩に感謝と感激を以て國家のために盡さなくてはならぬ大なる責任が有るのだ、況んや今日の如き國家重大時局に際し、今や擧國一致奮起し、或は國民精神の總動員に、或は國家總動員的態勢の完成に努め以て國家總力戰たるの實を發揮せなければならぬ時、國民としてその重且大なる責任を有する生命を親から斷つと云ふことは國民の責任を閑却したるものと言はなければならぬ。

此の意味において三宅君の自殺も又最悪であると云はなければならぬ、情においては忍びないものがあるが、その手段を責めなければならぬ、如何に最眉目に見ても何んとしても輕卒であつた私は別に死屍に鞭打つ譯ではないが警世のために自殺は罪惡であることを附言しておきたいのである

## 何故自殺を遂げたのか

三宅君の死は、餘りに突然であつたから、その原因さへ判らず、永遠の謎？、將又學園の平和を願つての犧牲か、彼の平素の教育界淨化の熱意を知る私は校内廓清のための犧牲であつたと解してゐる。

最愛の妻子を捨て、或は光榮ある聖なる教職に仕ふる身を棄て自己の身體を犧牲にするには容易の事でない、斯くすれば斯くなると知りながら親から生命を斷つた彼の心情には一片の同情の涙禁ず能はざるものがある。

彼の死の原因には何か曰く因縁が潜在しそうに思はれてならないのでその後いろ〳〵の方面で原因を調べて見た、調査の上から見ると思ひ當る節もあり、頷かされる點もある、併しそうかと言つて之れが死の原因だつと斷定する譯にもゆかぬ、おそらく彼の死の原因は彼自身より他に知るものはあるまい、彼は常に永遠の世界を憧れてゐた、永却無限の世界に旅立つことは哲人の希望であり、また歡喜であつたかも分らない。

死の直接の原因か、どうかは判らないが、兎に角、死の直前學校において種々な問題がもちつてゐたことは事實である。

その改革の急先鋒の一人は彼であつた。彼は得意の鋭い迫力のある論法で重里校長に肉迫してゐたのである、先づ順序として學校問題から片付けて行くことにしやう。

當時學校内で二組の〇〇問題があつた、之れを悉知してゐた三宅君は教育界の不詳事であるとて、重里校長に斷乎處分せよと迫つた、勿論重里校長もその眞相を知つてゐたから三宅君の亂彈は尤もであると思つてゐたのか敢て反對もせず、三宅君の手前だけは態よく繕ふてゐた、ところが、幸か不幸か三宅君の宿直の夜、問題の過中の一人と目されてゐる某教員の妻女から、次のやうな電話がかゝつてきた。

『今日主人は兒童の學藝品を買ふ金を立替へると言つて、銀行から二百圓引出して持參しましたが、學校の方では、兒童の學用品を買ふ場合には受持の教員はそれを立替へる制度になつてゐるのでせうか』

と、意外の電話があつた。

平素から怪しいと狙んでゐた矢先、此の電話があつたものだから、實に苦々しいことだつと歎息した、さうして、後でその二百圓の金の行衛を調査したら、某氏の手許に納まつてゐることが判明した。

此の醜怪な事實を知つた彼はいよ〳〵憤慨した、最早承知が出來ない、之れを此の儘不問に附しておくときは當校は教育界の伏魔殿だ、

『可矣』

俺は犧牲になると、雄々しく決心をした、他人の爲めに己を空うして起つ

夫れは古今東西を問はず麗はしき事であると、烈々として、校内廓清の信念に燃ゑて奮然彼は蹶起した、事實を以て校長に迫つた、過中の教員を轉任せしむると同時に本職も轉勤さして呉れと望んだ、此の條理整然たる革新意見にはさすがの校長も賛成せざるを得なかつた、宜しい斷行しませうとハツキリと明答を與へた、三宅君も校長の明答に滿足して、その日は握手して別れた、當時三宅君は暑中休暇中に胃腸を害したので胃腸の洗滌をして校長りして學校を休んで仮居で臥床してゐた。

九月十五日午後一時頃、重里校長は岸和田市南上町の彼の仮居を訪問した、臥床中であつた三宅君は突然校長の訪問に驚き、禮を厚うして奥の間に招じて來意を伺つた。

その時、校長より三宅君に渡きれたものは「泉北郡福泉校」へ轉任の辭令であつた、然らば、他の先生はと校長に伺つたら、重里氏は、他の先生たちは、現在のまゝであると頗る素氣なく答へた、之れを聞いた彼は愕然とした、此の片手落の處置に彼は極度に憤慨した、それから三時間ばかり爭ふた、彼は氣昂り、血熱して言々火を吐き、その語氣には悽愴の調が顯はれてゐた、宜しい、校長には、理非曲直を辨へず、鷺を烏と言ひくるめて總てを暗から暗に屠り去る考へなら、此の上如何に議論を闘はしても駄目だ、無益の議論は止そう。

『可矣』

僕も自決するから、校長も自決しろと、懐中から三ツ目錐を取出して校

長に攻め寄つた。此の狀況を側で見てゐた三宅君の妻女は一時はどうなることかと、はら〳〵してゐたそうだ、そうしてゐるうちに同僚の若林、田端兩先生が訪ねて來た、兩氏は仲裁に入つたが三宅君はなか〳〵承知しなかつたが、若林氏とは千種校時代からの親友であつたので、漸くその場は兩氏に一任することになつて納まつた、此の話は終始側で見聞してゐた三宅君の妻女の話であるから間違がなからう。

その歸途に重里氏は校醫であり、三宅君の親友である、堀木專之助氏を訪ねて仲裁を依賴したのである。

堀木氏は仲裁の一役を買つて、その夜、三宅君を自宅に招いて居中調停を試みた、此處でも又議論に花が咲いて餘程三宅君は興奮してゐたやうであつた、彼は宅に歸へつてから、ミツ夫人に向つて堀木は俺を馬鹿にしてゐると語られたそうである。



堀木氏の言つたことは餘程癪に障つたと見て、今度は三宅君から堀木氏に會見を申込んだ、その日は堀木氏の方では病人があつたので二日ほど延ばして吳れとの返事であつた。

十七日にミツ夫人は木積の本宅に歸つた、十八日夜、堀木氏を訪問して深更まで激論を闘かはしたそうである。

翌々二十日午前八時半頃〇〇を嚥下して自殺をしたのである。

以上は三宅君の自殺直前の經緯のあらましの筋書だけである、未だ〳〵悉しいことは聞いてゐるが、何しろ當の相手は現存中の人たちばかりで人の

名譽に關する事柄が多いので自由に筆を執れないのは甚だ遺憾であると、同時に何分三宅君が死んでゐるのだから、彼の言つたこと、行ふたことに就て一々之れを否定されてしまへばそれまでゝあるから、よい加減に筆を止めることにしやう。

併し此の經緯と大阪府知事、學務部長、阪上視學に對し『死を以て反省を促がす』旨の長文の聲明書を送つてゐる上から見ると、何が故に自殺したかは畧想像がつくではないか。

## 雷同のため生命を提供した堀木夫人

劇樂自殺二重奏事件の主人公、堀木ヒデエ夫人は、和歌山縣伊都郡紀見



村大字北馬場、澤宇一郎氏の長女として明治四十年九月五日生である、縣立橋本高等女學校卒業後、京都同志社女子專門部家政科に入り、同校を優秀なる成績を以て卒業し、大正十五年八月十六日、堀木專之助氏と結婚したのである。

澤家は鄉土においても豪農として知られ、嚴父宇一郎氏は村の名譽職は何に一つ缺かしたことのない德望家で、村民の氣受も非常によい。令弟實氏は、現に高野口尋常小學校に敎鞭を執つてゐる、東京文理科大學敎授兼東京高等師範學校敎授兼學生主事、岡本作次郎氏は實に夫人の叔父に當るのである。

夫君專之助氏は、大阪醫科大學出身の新進の醫學士である、專之助氏は

奈良縣宇智郡五條町二見の名門の生である、令弟利博氏は現に同郡牧野尋常高等小學校に教鞭を執り、令妹博子さんは貝塚町中鐵工業宮崎二郎氏に嫁してゐる、母堂イノさんは本年六十二歳で專之助氏と同居してゐる、

夫人との間に、高（十二）、學（九）、篤（七）君等がある。

## 堀木氏と三宅君の關係

三宅君の二男集二君は今年春、岸中へ入學したので人一倍子供を可愛がる彼は集二君を木積の自宅より通學さすには餘りに道が遠過ぎるといふのでミツ子夫人と相談の上、學校に最も近い所に仮居を構へることに決つたあつちこつちと探し廻つた、ところ學校にも近いし、あたりも靜かであるといふので、南上町に適當の家を見つけて其處に移つた、この仮居に親子五人は平和な日を送つてゐた、丁度其の家の附近に堀木氏の本邸があつた

近所でもあり、又堀木氏は校醫であるといふ關係で交際するやうになつた、堀木氏は醫業の方は非常に忙しいので自然愛兒たちの教育が怠るといふので、三宅君に家庭教師として、高、學の二兒を賴んだ、以來三宅君は熱心に教育をした、こういふ譯でヒデエ夫人とも親しくなり、お互頻繁に往來するやうになつたのである。

## 自殺した日の模樣

集二君の話によると、當日は別に平日と異つたことはなかつた、朝、學

校へ行くべき、いつていらしやいと、門先まで送り出して來て、歸りは何時頃だつと聞かれたので、一時半ごろですと答へたさうである、此の樣子から察すると九時過ぎであつたのであらう。

堀木夫人は前夜夫との議論が餘り激しかつたので、なんだか氣がかりになるので、妹のサトエさんに、三宅君の樣子を見にやつたときは別に異狀がなかつたやうであつた、時間は九時少し前であつたそうである、それから大分時間が立つてから、ヒデエ夫人が行づた時は已に三宅君は苦悶してゐたそうであつた、無意識に三宅君の枕頭にあつた、飲み殘りの〇〇を嚥下したのである、三宅君の自殺の報をうけた堀木氏は直ぐ馳け着けて應急の手當を施し、西田病院へ入院さした。



その時夫人は井戸端で洗濯をしてゐたが、何うも變に思つたので、オ前も飲んだのかと尋ねたら、夫人は、ハイ飲みましたといふたので、直ぐ緒方病院へ入院さしたのである。

前後の模樣から推定すると、夫人は三宅君より、餘程あとから飲んだらしい、三宅君は手當が遲れてゐたので、直ぐ死亡したが、夫人の場合は手當が割合に早かつたので十日間保つてゐたのである。

死をもつて反省を促がした、三宅君の尊い犧牲も、堀木夫人の死によつて輝やきを放つべきものに一沫の暗翳を投げられ光を全く消されてしまつた、光を消すどころか却て反對の者共に三宅攻擊の好題目を與へた。

「三宅は教育界革正の犧牲なんつて以ての外だ、彼は婦人問題を恥じて

ア、した最後を遂げたのだ』

と、さかんにふれ廻すものがあつた。

私は之れを聞いた時に、實に怪しからぬ事をいひふらすものがあると思つた、殊に本人が死後において左様した事をいひふらしたものは憎みても餘りある。

意外の事件に驚いた府學務部は眞相調査に乘出し、また、警察官も調査した、その結果、何れも何等醜關係なしと認めた、われ〳〵は日月に私照無しといふが如き嚴正公平な警察官の調査を絶對に信じてゐる。

當時、東洋一を誇る天下の大新聞、大阪朝日新聞に次の様に掲載されてゐた。



## 劇藥自殺二重奏事件

### 訓導の死『學園の平和願へばこそ』

### 純情後を追つた校醫夫人

死をもつて學園の平和を望んだ訓導と純情な校醫夫人の劇藥自殺二重奏が大阪府下に起り教育界の問題となつてゐる。

大阪府泉南都貝塚町東小學校訓導三宅利一郎氏（四三）と貝塚町驛前堀木醫院長堀木專之助氏（三八）夫人秀枝さん（三二）岸和田市岸城町居住の二人が去月二十日午前岸和田市南上町の三宅訓導宅で服毒相ついで死亡した事件について岸和田署が調査の結果、三宅訓導は學園内の暗鬪を廓清させるため尊い犠牲となり、秀枝夫人はそのまき添へをくつて死亡した一切の全貌が判明した。

同訓導は極めて眞面目な教育家であるが校長や同僚たちに排斥されることが多く、日ごろ悩みつゞけてゐた矢先、たま〳〵同校訓導間に不純な事件がもちあがり、重里同校長から校内の改革につき相談をうけたので校内に黨派を作つてゐる一、二訓導を轉校させ、自分も轉校させて

もらいたい旨を申し出でたところ、校長はこれを快諾しながらこ宅のみを泉北郡鶴泉小學黨に轉校させたので、かねて死を暗じて廓清をはかるこ決意してゐた同訓導は大阪府知事、學務部長　阪上視學、重里校長に對し「死をもつて反省を促がす」旨の長文の聲明書を書き綴つて發送し、二人の愛兒たちを學校に送つてから從容こ服毒自殺をはかつたものである、

これよりさき同訓導が親交のあつた同校醫の堀木氏に對しその苦衷を訴へ、死をもつて校内の廓清をはかるこ力說したので同　師はこれを極力慰撫してゐたが去月十九日夜それとなく別離の挨拶に同醫師宅を訪れたので思ひとゞまるやう厳く叱責した、その後事情を知らぬ奉枯夫人は夫の言葉づかひが强かつたから死を決口させそにけつたものこ誤解し、心配のあまり二十日午前九時ごろ　こつこり三宅訓導宅を訪れたところ果して服毒、苦悶してゐたので『すみませんでした　こ叫びつゝ手當したが蘇生しさうにもないので思ひつめたあげく飲み殘してあつた劇藥　飲んで死亡したといふのである　たゞ、府學務部では意外の事實に驚き直ちに眞相調査を行ふことになつた。

## 暗然語る堀木醫師

堀木醫師を四日自宅に訪へば

『三宅訓導は實に眞面目な哲學的素養がある　立派な教育家でした、教育界革正のため犧牲になられたことはまことに同情にたへませんが、妻が淺はかな考へから自殺したため、心中でもあるかの如く世間に傳へられてゐることは三宅訓導に對して甚だすまないとおもひます』

と暗然と語つた。

## 重里貝塚東小學校長談

『去月十九日、三宅訓導に對し轉任の辭令を郵送したが、折返し不正の辭令を受取つた旨の手紙が來ました、つまらぬことになつて世間に對しすまないと思ひますが、教育界革正のために自殺したといふことは疑問で他に大きな原因があるのでないかと思ひます』

以上は同新聞紙に掲載された全文である、堀木氏の談話にまつても二人の間に何等醜關係のなかつたことは明瞭である、夫人は午前中は岸和田の本邸の炊事は申すに及ばずなにから　なにまで切盛りし、午前十一時過ぎには貝塚の醫院に行つて、夫君のよりよき助手者として甲斐〳〵しく立働き

午後十時過ぎに夫君　伴はれて歸宅し、夫君は大なる按摩好きであるから毎夜二時頃まで按摩するのが日課であつた、しかもこれが結婚以來一日も缺かしたことはなかつた、姑に仕へて至孝のよき嫁御であり、夫君に事へて至眞の妻であつた、夫人は常に人間生活の基調は家庭の團欒を除いて他に求めることは出來ないといふ信念をもつてゐた、さすがは女子最高學府の同志社家政科出身が物をいふてゐた、夫人の明るい微笑は堀木氏の家庭生活の光明となり、姑との間の折合も非常によく、夫婦間も伉麗最も睦まじく衆人羨望の的であつた、經濟的にも惠まれ、何の不自由もなく豊かな生活をなし、また、夫君の年齢の上から見ても三宅君より五つも若いし、姑イノさんは昔片氣の嚴格な人で一刻も家を外にするやうなことはなく年



百年中家庭に在つて眼を光らしてゐる、故に時間的に見ても家庭上から見或はその性格から見、素養の上から、縱より見、横より、いづれの點より觀察しても火遊するやうな理由は少しもない、夫人は全く瞬間的の發狂であつて雷同的のもので生命を雷同の爲めに提供したものと私は斯く解してゐる。

茲に一つ聞遁し得ぬのは重里氏のその後の奇怪な言動である、氏が新聞記者に談話の形式をもつて眞相？を發表したうちに『教育界の革正のために自殺したといふことは疑問で他に大きな原因があるのではないかと思ひます云々』の如くは暗に堀木夫人との間に醜關係があるので夫れが原因したかの樣に諷刺してゐる、

若し氏に、三宅君は革正の犧牲ですねと聞けば頭を左右に大きく振つてニヤリと北叟笑で、左に非ずと云はぬばかりの態度は、如何にも小面憎い堀木夫人の死をもつて三宅君の死の主因にあてはめて公然追撃してゐるのは之れを昔風にいへば首吊の人の足を引つぱるやうな刻薄極まる調子でなからうか。夫人の安價な同情死は彼等にとつては自己の非を覆ふのに勿怪の幸であり、亦となき好題目となつてゐる、それだけ三宅君にとつては不利である、夫人さへ自重してゐてくれたならこんな誤解も招かないものを今更いふても致し方がないが吳々も殘念でたまらない。

又十九日に轉任の辭令を郵送したか折返して不正の辭令を受取つたと手紙が來たといふてゐるが、之れらも嘘八百で、十五日に三宅君の病床を訪



れて辭令を手渡しやうとしたが三宅君が受取らなかつたことに少しも言及してゐない、私は茲で聊か愉快を感ずことは、不正の辭令云々とハツキリ重里氏に言つてやつたことである、こゝらが三宅君の氣持は現はれて胸がすく思ひがする、神聖な辭令を不正呼ばはりされても校長として責任を感じないのであらうか。

最後に直言しておきたいのは、彼の部下に對する温情と友情の問題である、友情なるものは、人間相互の誠意の上に成立つものであることを强調したいまでだ、人間相互の誠意といふことを理解せぬものが幾ら勿體ぶつても駄目だ、重里氏は來年で教育界三十年になるので何事も事勿れ主義で押通してゐるそうであるが、それは氏個人の問題であつて、公職に仕ふる

ものとしては遺憾なことである。今にして反省するに非ざれば、氏は勿論教育界は永遠に闇暗を彷徨せねばなるまい。

## 三宅利一郎君の偉大を示す盛葬

君を送るべき最後の日は来た、昭和十四年九月二十一日午後四時、是ぞ永久に忘れ難き告別の日である、木積の本邸で執行されたが生前における君の人格を慕ひ、井畝代議士、原府會議員、田中府立佐野高等實踐女學校長初め、教育界、實業界、政界の名士無慮千數百名、此の多くの人達の熱誠を憶ふ時、感激深き喪主初め關係者一同は聲を上げて慟哭するあり、三宅訓導の葬儀は同町始めての盛儀であつた。



**如何に君の生前の世間的の偉大さを物語るものである、棺を掩ふて知る人の偉大さ、私共、今何をかを云はん。**

400
216

昭和十四年十二月二十五日印刷
昭和十四年十二月三十日發行

（非賣品）

大阪府岸和田市別所町三九〇番地
著作發行兼印刷人　原　靜　村

大阪府岸和田市沼町一八五番地
印刷所　南海印刷工廠

複製
嚴禁

終